

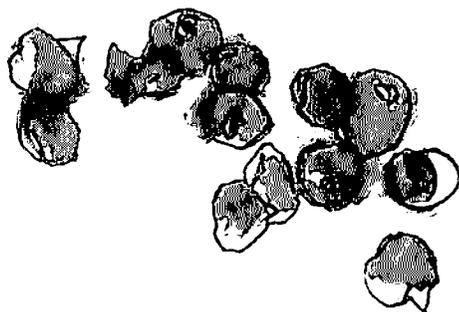
| | |
|--------------|---|
| Title | 【interview】野村嘉代さんに聞くアートと対話の可能性 |
| Author(s) | 高橋, 綾 |
| Citation | 臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 11-19 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/71167 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【interview】 野村嘉代さんに聞く アートと対話の 可能性



聞き手：高橋 綾

絵 野村嘉代

● 絵を作るプロセスやモチーフ

i まずは野村さんの絵そのものについて少しお話ししていただきたいと思います。描くプロセスやモチーフについてですが、今回の作品は、果物がモチーフだと聞いていたんですが、これまでずっと果物というモチーフで描いてこられたんでしょうか。

野村(以下n) 特別果物だけにこだわっているわけではないのですが、物の「かたち」の面白さからいえば、やっぱり自然界にある形、植物の持つている「かたち」に惹かれる場合が多いです。花とかをモチーフにすることもありますが、今回はたまたま果物のモチーフでまとめたという感じですよ。

i 野村さんの作品は、花や植物「そのもの」を描いているわけではないですね。習作の段階で実物を写生するというのをなさって、その次に展覧会に出たような大きいサイズの、(はつきりモチーフの出でない抽象的な)作品に移られるというプロセスがあると思うのですが、その写生の習作と作品の間はどんな風につながってるのでしょうか。

n 習作は何十枚も描くのですが、最初は自分でもモチーフのどこにひかれたのかわかってないこ

とが多いです。習作はそれを描いていくなかで、自分がモチーフのどこに惹かれたのか、どこを面白いと思ったのかを発見する過程ですね。それで例えば色とか、形とか、その物の持っているイメージというような感じで自分の惹かれたところがはつきり見えてくると、大きなサイズに移ることになります。

i ちなみに今回のGT(※ギャラリートークのこと、今回の展覧会で行ったギャラリートークは通常のものとは少し異なるが、ここでは名称はそのままとする)の題材になった作品のモチーフはなんだったのでしょうか。

n もとにあったのはイチジクなんですけど、食いしん坊ということもあって、イチジクがほんとに好きで、味も、形も存在感や手触り、木になっっている感じも、とりあえずかつこいいなって思っていて。イチジクのちよつとグロテスクな感じ、生々しい感じも面白いと思っていて、またそれとは別に作品に関しては自分のなかの生々しい部分を出したいと思っていて、その二つの動機がリンクして、何を描こうと思ったときにイチジクが浮かんだんです。

i 写生してモチーフが固まってくるまでにどれくらい時間が?

n 時と場合にもよりますが、今回は結構自分のなかでいろいろ蓄積されてたものがあった感じだったので、結構早かったと思います。たまたまつてたものを出すみたいな感じで、結構衝動的に描きあげました。

i 前に野村さんが哲学カフェでみんなまで議論をするプロセスが、自分が絵を描くプロセスに似てるっておっしゃってたのを、私覚えてるんですけど。どのへんが似ているんでしょうか。

n 私もそう思ったことは覚えてるんですけど、ど・(しばらく思考中)・普段は見逃していたようなところを、一つ一つ拾っていった検証していくみたいなのところが似てると思ったのかな。身の周りのイチジクも普段普通に果物として見ているわけですが、そういうった普段の見方以外に、その果物が別の意味を見つけていく行為が私にとっては絵を「描く」ということなんです。それを描くことではなくて言葉でおこなっているのが哲学カフェのプロセスなのかな、と思っただけです。

i 野村さんが絵を描くとまっけて、どの程度言葉にして考えているものなんでしょうか。

n 考えているとは思いますが、ただ観念が先に立ってしまうと面白くなるので。もち



ろん自分がこう描きたいとか、イチジクがこうあるけどそのイメージを借りて自分の内面をこういうふうに表示しようというのとは最初に思います。でも絵の具で描いていくと、自分が予期しなかったことが

画面に出てきたりして、それを利用したりもするので、自分の考えの及ばないところといったりということもありますね。最初に強い動機みたいなものがあるって、それに問いかけたりしながら、どっちのほうにすすんで行くかを探っているんですけど。

● トークと作家との関係

i 具体的にこのあいだのGTはどうでしたか？

n このあいだのGTはちよっと緊張する環境

でしたね。場所も広いし、二つのグループが隣り合ってた話に集中しにくい感じではあったし、なによりGTしてる後ろに、さらにそれを見てる観客がいるというのもちよっとやりにくかったかな、と思います。でも一番気になるのはああいう形のGTに作家も同席しているというのはどうだったのかな、ということですね。

i 私が思ったのは、トークの満足度としてはよかつたんじゃないかなということですね。私たちのパートが終わって、それを辻さんが引き継ぐ形で「本物」のギャラリートークというか、作家のお二人とのトークというのをやってくれたじゃないですか。あれがあることによつて、私たちのパートも引き締まったという印象を持ちましたけど。参加者のトークと作家のトークが両方あることによつて、いいコントラストがついたかと思いたしたね。私たちが今までやってきたアートをテーマにしたダイアローグは単に話しかけておわりという形だったので、絵の見方が変わるとかかっていう面白さはあったけど、結局これを話してなんになったのかという感想を持つ方もおられたと思うんですね。でも今回の場合は観客が話したあとに作家が何を考えているかということが聞けたのでよかつたんじゃないかと思えます。やっぱり参加者は知りたいと思うんですね。作家がどんな意見を持っているのかとか、自分の感じたこと、話したことを描いた人



右から順に、作家紹介をする辻さん、おのさん、野村さん

がどう受け止めてくれるのかというようなことを。だから後に作家のトークがあることによつて「受け取られた」感というのがあることだと思います。観客が参加して発生したコミュニケーションが作家の人や辻さんによつて受け取られて、そこでまた続きが話されたという感じで。ああいう流れがあったほうが、もしかしたら参加者の満足度も高いのではないかな、という気がします。後半のパートの司会をしてくれた辻さんも、いろいろ話し合ったけど、最後の作家トーク

が最終的な答えなんだという印象は与えないようにしてくれたいと思うし。

n そういう意味では、トークの場に作家がいなくともその受け継ぎつてというのがスムーズにできにくい訳ですよ。

i 最後の作家トークで、おのさんは作家としての見方がはずされていく感じが面白かったみたいなのをいってかれてたような気がするのですが、そういうふうに参加取っていただけるのであれば、作家の方があの場にいることにも意味があるのかなと思いました。あとは参加者の人が作家がいるということ、その人が答えを持っていくんじゃないかとか気にしなれば……。

n そう、準備段階でもかなり議論になりましたけど、参加者の人にとつて作家が後ろでじつと聞いているというのが、話している参加者にとつてはどうなのかなと思って。

i 作家がその場においても、参加者が作家に答えを求めないで、対話に集中するということが可能だと思います。でもそれには司会の技量が必要かもしれません。

● 絵以外のテーマの可能性

i こういったGTって、どんなタイプの作品でもやって面白いと思われませんか？

n 具象画とかでやるのは難しいのかなとも思ったんですが。物の形やモチーフがはっきりしているものでもできるんですか？おのさんの作品もおはあさんというのわかるけれども、ちよつと非現実的な空間だったり、観念性が全面に出てきているので比較的話しやすくないと思うんですが。これがもし「静物画」とかだったらどんなふうな話ができるんだろうと思います。

i 私は写真でもできると思います。何が描かれているのか、モチーフについて話すのであれば、確かに具象画は離しいかもしれないけれども、でもモチーフ以外で伝わっているものってたくさんあると思うんですね。例えば色であるとか・前に「手」の写真でああいうトピックをやってみたんですけど、それでもできました。手が写っているということは明らかにわかるんですけど、その手がどんな手かとか、ライティングとか、それはそれでできると思いますね。それも司会の難しさということに関係しているかもしれないですが。



n そう、話の広がり限定されるのかなと思っ
て。

i そういう面もあるのかもしれませんが、でも
抽象面だと広がりすぎて難しいところも
あると思います。この前のトークも「私には……
に見える」という人もいれば色彩のコントラス
トに注目する人もいたりで。

n あとはインスタレーションとかでやってみ
ても面白いかなと思いました。絵だとその前に
かたまって座って一つのものを見てという感じ
だけど、インスタレーションだといろいろ動き
まわって見ることもができるし、しゃべっている
人も動き回れるからそれも楽しいかなって。一
枚の絵の前に座って前に向かって絵や、黒板の
方をじつと見てという感じがちょっと奇妙かな
と思ったりしたので。

i 他にもダンスのワークショップのあとで
今回のようなトークをするという企画があるの
で、それをやっている人にも聞いてみたいとい
けませんね。私の予想では、ダンスとかになると
不確定な要素が増えるから難しくなるんじゃない
かというような気もします。あと時間の流れ
のなかで成立するものは、ここがいっていう
のを止めて指摘することができないというの
もあるし、でも、見る側のほうも動きながら感想を
言うってというのは面白いかもしれませんね。

n インスタレーションとかのほうを受け止め
方が様々だったりするので、感想を聞いてみた
い感じがします。絵よりももっといろいろな見
方が出てきそうで。

i 絵でもそうとういろいろな見方ができると
思います。

n でも絵だとやっぱりその作品の枠の中だけ
で話が進んでしまうことが多いけど、インスタ
レーションとかだと（空間とか雰囲気とか）作品
そのものの以外の要素にも目が向けられるのでは
ないかな、と思います。

● 絵を描く経験と作品の見方

i 感想のなかでは、印象的なものとか面白い
ものとかありました？

n 一番初めに初めてリハーサルでやってみた
ときのことが印象に残っています。絵について
いる「傷」という言葉がでてきたことはすごく覚
えていますね。自分は描く側なので「傷」とは
言わない。自分は描く側なので「ひっかきあ
と」ってとらえるし、「道具はなんだろう」と思っ
たり、感触などがリアルに感じられるところが
あるんだけど、そういう背景を持たないで初め
て作品を見た人は「あつ、傷がある」ととらえる
というギャップが新鮮でしたね。

i 絵を描いている人、描いた経験がある人が絵
を見るのと、絵を描かない人が絵を見るのって
やっぱりちがうとらえ方をするんですかね？

n そうですねえ、絵を描いている人はその絵
一枚だけでは判断しないというか。その絵はよ

くなかったとしても、可能性みたいなものについて話したりはすると思いますね。自分のような年では、まだまだ納得のいく作品は作れないのはあたりまえで、できた一枚の絵のなかに「次の絵につながるようなもの、絵の可能性があるかどうか」というようなことを話したりします。でも絵を描かない人っていうのはそういうところえ方はしないわけで、やっぱりこの一枚の絵がどうか、ということについて感想を言ってくれますね。そういう意味では（絵を描く人の見方も、描かない人の見方も）どちらも勉強になるところはありますね。ずっと作家同士、絵を描く人達のなかにいると、一枚一枚で完結しているという見方よりも、他の作品との関連性を考えた見方をしがちなので。（絵を描かない人に）一点一点がどうかかっていう感想を言ってもらえることもすごく嬉しいし、勉強になると思います。

i 参加者の方で美大の方がいらっしやって、その方は「即興で描いたのか」とかいう技法面のことに関心があつたみたいですが、野村さんが他の人の絵をご覧になるときも「モチーフはなにか」とか「なぜ赤をつかったのか」というような（書き手の側に立ったような）見方をされることが多いですか？

n そういう見方を作品によってはすることもありますが、やはり好きか嫌いかということと

ろから入るところが多いですね。「好きだ」って思ったら、この絵のどこにひかれたのか、とか自分の絵とどちらがうかなくなとか、この表現きれいやけどどうやって描いたんだろう、ということも考えたりはしますが、一番最初に持った印象というのが大事にしたいから、あまり技法面から入っていかないようにしたいとは思っています。美術館の雰囲気も大事だと思ってるので、なるべくすいているときに行きたいし、絵と絵の間隔や配置とか、見た人と作品がその場でどういいう出会いをしているかということも大事だと思います。

i 展覧会でも、「この一枚の絵」という感じでは見てないんですね。展覧会の雰囲気の間でとか、年代順の連続のなかで一つの絵をとらえているわけですね。

n 全体の流れのなかで一つの絵をとらえるという見方は常にしていますね。さっきの話に戻りますが、自分でも描いていると「あつ、いいな」と思う作品がほとんどできたりすることもあるんですけど、それだけで終わってしまうことがあるんですよ。一回きりの「まぐれ」みたいな感じですね。私自身もまだ納得のいく作品というのはできていないんですが、それでもこの作品はけっこううまくいったなと思うものは、それ一枚がどうというよりも、それを描いたことに

よって次のステップ、作品につながり、それを描くことで次の構想が出てくるような作品ですね。

i じゃあ、「こういうのを次描いてみよう」という感じで、次の展開が見えてきた作品というのが、野村さんにとってはいい作品なんですね。

n そうですね。一個一個で切れていくのではなくて、作品自体も大事だけれど、描くことがつながつていくということが大事だから、それをいかにいい状態で保っていけるかということが大事なかな。

i 他人の作品に関してはどうですか？自分の作品に関しては、新しい見方が発見できたなとか、次につながるポイントとなるのがある作品だとして、他の作家の作品を見て「いいな」と思うときにはどんなところがポイントになつていっているんでしょう。例えば、野村さん白



身がその作品を見ることによってインスピレーションが湧いて、新しい作品ができてしまう、とかそういうことも「いい」という評価のうちには入ってくるのかなとは思いますが。

n そういうタイプのものもあるし、好きだけど自分には描けないと思うタイプのものがありますね。ぜんぜん違うけれども好きというのもあるし。でも、やっぱり作品がそれ一枚だけでは完結してないということが基準ですかね。その作品の外に可能性が広がっていくようなものに惹かれますね。こんな言い方は抽象的だろうか。ほとんど「感じ」の問題なんですけど。

i 例えばピカソ美術館でピカソの作品を全部見ていって、これがピカソのなかでは転機になった作品だからこれはいい作品だ、ということも違うように思うんですが、その「広がっている感じ」というのはもう少し細かく言うとうどんな風になりますか？

n その作品でいっばいっばいっていうのではなくて、その作家の潜在能力みたいなものが感じられるものかなあ。そういうことを言葉にするのはなかなか難しいですね。

i こういうことをお聞きしたのは、アートをテーマにした哲学カフェでも時々そういうこと

を感じることもあるからです。どんな作品でも感想が出ることは出るし、いい作品か悪い作品かってどんな観点で区別したらいいのかな、ってたまに考えることがあるんですね。私が思うのは、いろんな見方ができる作品、いろんな人いろいろな感想を持たせる作品がいい作品なのか、という気もするのですが。

n どんな作品がいい作品かということの基準はいろいろあると思うし、その人が普段暮らししている中で何を大事にしているかということに關係してくるところはあるので一口には言えないけど、やっぱり絵を描くということは、かっこよく言ってしまうえば、その人の「生き方」ということだと思うんで……

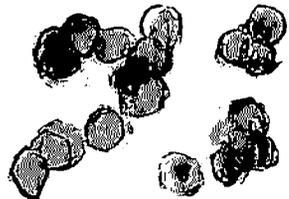
i いやっ、かっこよすぎ！

● 絵の経験を言葉にすること、他人と一緒に見ることに

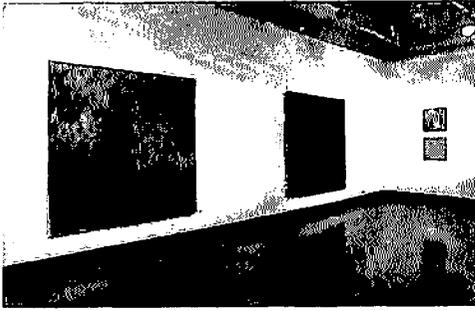
i 話は変わりますが、GTって、「絵の経験を言葉にする」ということが一つのポイントで、あともう一つは「他人と一緒に見る」というのがポイントだと思うんですけど、「絵の経験を言葉にする」ということについてなにか思うことがありますか？もうすこし言葉を付け足すと、絵を見る経験というのはそれ自身で完結していると

いう意見もあると思うんです。例えば、絵の経験を言にすることでなにが抜け落ちる人も言い方をする人もありますが、そういうった意見に関してはどう思われますか？

n あー、でも言葉が必要ないと全然思わないですね。言葉がビジュアルを助けてくれるということもあるから、絶対必要なことだとは思いますが、もちろん言葉だけでは成り立たないし、絵は絵だけで成り立つといえはそういう部分もあると思うけれども、でももつとそれ以上のものを生み出そうと思つたら、言葉というのは必要な気がします。作家として、言葉だけが先行するというのはいやなんでしょう、作品と言葉というののバランスをとりたいなあと思っています。ビジュアルだけほんと出してどうぞっていうのも、自分の作品に対しても、見る人に対しても失礼という感じがして、(作品プラスなにか自分で言葉で説明するなり伝えるなりして) 自分が描いたものを出して見てもらうということの責任というのは果たしていかなきゃいけないのかな、とは思っています。それに絵を見て感じてい



絵 野村区代



たことを、言葉にしてそれでもっと実感できた
りすることもあると思うんですね、だから「絵
の経験を言葉にする」というのはいいことだと
思いますけどねえ・・・

i 「他の人との一緒に絵を見る」ことに関して
はどうですか？そんなことして何になるのと思
う人もいるかもしれないですが。

n 合う人と合わない人がいるかもしれませんが
ね・・・私はあの場にいたらたぶんしゃべれない
気が。(苦笑)

でも作家と
しては、その
場において他
の人の意見を
聞くというこ
うことがな
にかしらす
事なような
気がします
が全部ブラ
スになると
は言わない
けれども、少
なくともマ
イナスでは
ないですね。

そういうことで解放されていくということも大
事だと思っし。

i 今やっているGTだと、絵を見ることを楽
しむことの「一環」として、他の人の意見も聞いて
みるというところが大きいと思うんです。観客
として見るときには、いろんな意見があつたら、
確かに楽しいという気はするし、見方が変わる
ことが楽しいとかそういう見る側としての楽し
さはあると思うんですが。作家の側から見ると
どうなんでしょうか。今回のGTが作家として
絵を描いていく上でなにか役に立つことはある
でしょうか。

n 作者に直接の影響というのはないかもしれ
ないけれども、そうやって見る人が少し絵に近
づいてくれたり、(こう見なければいけないとい
う思いこみから)解放されていろいろな見方を
するようになってくれば、描く方の意識も変
わるような気がします。せっかく描いても、「絵
のことわからないんです」って言われるとさみ
しいし、そうつづけばねるまえの手がかりとして、
そういう見方でもいいんだという感じで絵に接
してもらえる場があるというのは、作家として
嬉しいですね。

● 作家と観客、作品と観客との関係

i 野村さんにとって、作家と観客との理想の
関係とはどんなものですか？

n 理想の関係？？難しいですね。

i えっと、そしたら聞き方を変えると、人に見
せるということとをどれくらい意識して描いて
るんですか？「これ見た人はこう思うかな」とか考
えて描いてます？それともあんまりそういうこ
とは考えなくて描いておられますか？

n ずっと考えてるわけじゃないですね。でも
絵が進まなくなった時とか分からなくなった時
にはなるべく第三者の目になって見直してみよ
うとはしたりしますけど。例えばそういう時
は三日ぐらい絵を見ないで置いて、久しぶりに
学校に来て絵を見る、とか、あとは逆立ちして絵
を見るとか。(苦笑)まあ、そういう形で見
るの目というのを考えることはありますけどね。
でも逆に描いてる時に見る人のことを意識し
ないと、絵が固くなってしまうんですよ。だから
なるべく考えないように考えないようにして、
そういう意味ではあえて意識してないようにし
ていると思います。

i 自分の作品を「こう見てもらいたい」とい
うのは強くなりますか？

n そうですね。私の作品というのはやっぱりジャンルでは抽象画に入るものなので、「抽象画はよく分からない」と突き放されるのはさみしいですね。だから、「この形がなにかは分からないけど、こう見える」とか、「形が単純におもしろいな」とか「この色が好き」とか「この絵よりはこっちが好きだな」とか、その人なりのきっかけで、それをみてなんかちよつと「ほわつと」して欲しいと……

i えつ、「ほわつと」してほしい？

n そうですね、私が絵を描いているからかもしれないけど、いい絵を見たりすると、いい映画を見たあとみたいな感じで、世界が違って見えたりとか、なんかちよつと気持ちちよつとよくなったり、逆にいろいろ自分について考えたり、なんかそういうきつかけになれたらいいな、そういう関係が理想かなと思っっていますね。いい絵を見ると、自分の感覚が開いていくような感じになるんですよ。そういうのが理想ですかねえ、作家と観客というより、作品と観客の関係ですが。

● 美術と教育

i 野村さんは美大を目指す高校生に教えるということもされているようですが、絵を教えるって大変そうですね。

n そもそも教えられるものなのか、という疑問もあって。私が言ったことがその人に後々影響することを考えると怖くなるから……あんまり「教えてる」という感覚はなくって、一緒にやっているとこの感じですね。先生として上からものを言うということはないようにしています。でも私のほうがちよつと先輩だから、「こもうちよつとこうしたほうがいいよ」というアドバイスはします。でも同時に「こうしなさい」ではないんだよ、ということも伝えなければならぬなと思っっています。

i 芸大の先生とかはどうなんですか？

n ああ、でも芸大でも基礎的なことならちよつと、大学院とかになつてくると、やっぱり同じ絵を描いている人同士の先輩として色々アドバイスをくれる感じですね。だから「この絵はこはこうなれおしたほうがいい」というようなことはほとんど言われぬです。「こういう作家知ってる？」とか「この作家も見てみたら？」とか直接作品には触れないことが多いです。それで「この作品はどういう背景があつて描いたのか」とかそういうようなことをいろいろ話しているうちに、自分の考えがまとまってきたり、「そのあたりをつめていったらどう？」みたいなことになつてきて……というようにことがほと

んどですね。

i そうか、絵を描くことを指導するというのもなかなか大変なんですね。「こつと描きなさい」というのもおかしいですね。

n そう、答えがあるわけではないですからね。まあよくあることでですけど、作家として褒れられても先生としては褒れられないということもあるんでしようねえ。

i ははは……

n 日本の美術教育ということで言えば、高校での美術の授業もなくなつてきているし、それが進んでいくと、絵を描く人と描かない人の接点なんてまるつきりなくなつてしまふんじゃないかな。高校の美術の先生とかも非常勤になつてきているし、授業数も削減されているし、ひよつとしたら高校生は美術大学というものがあつたら知らないんじゃないかというような状況なわけなんです。

i いや、それは哲学もまつたく同じですよ。合理性の追求とかに主眼がおかれたり、不景気になること切られるという……哲学もそういう苦境に置かれていますね。

n 海外ってそうじゃないですよ。伝統が치가うし。

i そうそう。哲学もそうだけど、一般の人への浸透度とか土台の大きさがちがうんですよ。一目の置かれ方もぜんぜん日本の状況とはちがうし。

n だから、海外の学校みたいに、小さいときから美術館に見行つて感想を話し合おうとか、そういうことがあつたほうがいいんじゃないかと思つて。

i そうそう、イギリスのテートモダンでも小学生が幼稚園生相手のGTみたいのをやっていましたね。結構高度なことをやっていましたよ。モネの睡蓮の絵の前で、縦線と横線がなんか・・・というような話とがしてましたね。

n そういう試みが継続してされるといいですね。一回でもそういう経験があると美術に対する親しみの度合いがぜんぜんちがうし、壁を感じなくてすむし。壁を感じられるのが一番いいですからね。

i 日本の美術教育って知識しか教えないじゃないですか。美術史とか、これは誰の絵だとか、あとはなんでしたっけあれ、色味のサークルと

か。

n 色相環ね(苦笑)。

i そんなことよりも絵の感想をみんなで言い合つていうようなことをしたほうがいいんじゃないかと。

n なんですかね、日本人の気質とかもあるんですかね。自分の意見をあまりいわないとか、知識をおさえてからじゃないと何もいわない、いえないみたいな。

i 私は美術教育とかも、知識だけじゃなくつて、みんなが絵をみて話すとか、そういうバリエーションがいろいろあつていいと思うんですよ。それだけじゃなくつてアーティストの人が学校に来て、子ども達と一緒になにか作るとかいうことも、もつと頻繁にされていいと思う。美術館に行くのもあつていいけど。

n そういふふうには教えることが表面的なことではなくつて、内容のほうまで踏み込むようになる、教える方にも覚悟がいるし、ちゃんとしてないとダメだし、そうすると教えることのできる人材というのが足りないということにもなつてくるんじゃないかと。

i そうですね。私たちの研究室でも高校の授業をさせてもらつたりということをしてるので、いままでの知識を教師が与える型の授業ではないようなことができないかなと考へていることもあつて、美術の教育でもそういうことが考えられるのではないかと思つているので。

のむらかよ

兵庫県出身。京都造形芸術大学洋画コース卒業、
京都造形芸術大学大学院芸術表現専攻終了。
現在、京都、神戸を中心に油彩による作品制作、
発表を行っている。2005年には、京都での個展
を予定している。